

〈書評〉

宮本真二・野中健一 編

『自然と人間の環境史

(ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第1巻)』

(海青社, 2014年3月刊, 396頁, 3,800円+税, ISBN978-4-86099-271-2)

萬 野 晴 彦

1

どのようにすれば人と自然はうまく共存できるのだろうか。私が大学で教育学を専攻して卒業後、北アルプスの山小屋で勤務していたときに感じた疑問だ。そこから国内外を旅したあと、この疑問を掘り下げたいと思い入学した地理学の大学院で、指導教授の勧めで手にしたのが本書である。

本書は「地理学ならではの環境・環境史研究は何か?」という問題意識にたって、人々の土地への適応過程、すなわち「人はどこにすまうか」を対象として、それに関わる自然現象や相互規定要因を実証的に究明することをめざしたものである。以下が章目次と執筆者名である。

序章 人はいかにして住まうか?

人間からとらえる自然-関係性の地理学の再構築から環境史へ(宮本真二・野中健一)

第I部 環境史と居住史

第1章 グレート・ジャーニーの行方:低地居住の過去・現在・未来(小野映介)

第2章 低地への適応:洪水を「利用」するベンガル・デルタ(宮本真二)

第3章 「気」を逃さない理想の小盆地:朝鮮半島を中心とした形成派風水の場所選びと環境改善(渋谷鎮明)

第4章 砂漠に住まう:カラハリ狩猟採集民の居住地選択と決定(野中健一)

第5章 移牧タイプとその変化:ネパールの移牧から(渡辺和之)

第II部 人為的改変

第6章 古環境変動と人類の対応(藤木利之)

第7章 愛知川の氾濫と安土城築城期の大中の湖(古関大樹)

第8章 動き続ける大地の利用と対峙(目代邦康)

第9章 焼畑による山地植生の利用と開発:17~18世紀の紀伊山地を例として(米家泰作)

第10章 世界自然遺産「小笠原諸島」における植生破壊と再生の環境史(吉田圭一郎)

第III部 天変地異と対処

第11章 近代における農地の水害復旧：京都市周辺を例に（赤石直美）

第12章 災害と認識：天明浅間山噴火災害絵図の事例から（大浦瑞代）

第13章 インド・アッサム州、稲作体系と気候変動（浅田晴久）

第14章 フィリピンの気象と災害（森島 濟）

#### 第IV部 地理学と環境研究の今後

第15章 ゆらぐ地球環境の中のサヘルサヘルの気候・社会変動：気候と社会の変動，緑の回復をめぐって（門村 浩）

第16章 自然地理学と人文地理学をつなぐ環境史研究の課題と展望（小泉武栄）

序章では、編者の経験をふまえながら、「人間と自然の関係性」を明らかにする環境・環境史研究の意図と可能性を、第I部「環境史と居住」では、人の歴史的・文化的な居住のあり方を論じている。第II部「人為的改変」では、人類の誕生以降、環境（自然）をどのように改変してきたかという過程に着目し、人々の営為とその背景の解明を試みる。第III部「天変地異と対処」では、予測不能な自然現象、災害への対処、や活用を論じる。終章の第IV部は「地理学と人間と自然の関係性」はやや論調が異なる。研究から得られる地理学知を今後どう生かすかに軸足を置いたこの研究グループよりも前の世代で、早くからこの分野に関心をもってきた2人のシニア研究者による体験的研究史の展望である。

この、「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究シリーズ」は2007年に日本地理学会に設立された同名の研究グループを母体とする成果論集である。「人間－自然の相互関係」という地理学の古くからのテーマを、現代の文理融合の新鮮なまなざしで若手・中堅の研究者がとりまとめたものである。

本書の特徴は、地理学の多方面にわたる関心を掲げ多分野との融合的な研究成果としているが、この巻ではあえて地理学的アプローチにこだわっている。地理学的な発想や方法が他分野の人たちに注目されることにより、新たな解明のための相互協力が活発になることを願い、本書を通じて、「人間と自然の関係性の解明」や「環境史」に興味をもち、それを地理学で究明することを志す人たちが登場することに期待したものである。

序章は人の生活が土地の歴史の中で成り立っているという現実にたつ実践研究に先立ち、その枠組み作りをするため、日本の戦後における自然－人間関係の地理学の研究史を編者2名がレビューする。地理学研究が確立されていくなかで、自然地理学と人文地理学の二項対立構造が形成され、問題設定が自己の領域内で消化されるような研究になってしまったこと、現代の総合的な視点が求められる環境問題などにおいては、特定の地域での現象を特定の現象として完結できなくなってきた反省から、編者はフィールドというリアリティを通して土地にかかわる要因、時間軸と空間軸で複雑に絡み合った人と自然との関係性を読み解くことが、現代の学問に求められていることであると主張する。

以下、本論に相当する第1章～第14章を順追って紹介する。筆者の現在の関心が、砂防と立山信仰を通じた自然－人間関係にあるため、第8章、第11章はとくに詳しく紹介したことを予め断っておきたい。

第1章は、エクメネー（居住地）の平面的、垂直的变化に注目し、地形・地質研究の新知見をもとに、「平地学派」と「地形発達史研究」との結節を試みたものである。沖積低地を人々の活動の舞台と捉え、沖積低地の発達史について様々な角度から検討するとともに、変化する舞台によって人々がどのように居住し、自然災害に対処してきたのかを通時的に解説する。沖積低地への人々の進出にともない、人々の土地の高低に対する意識は薄れるとともに、「自然災害」のリスクも高まってきている。今一度、土地の履歴と土地に生きた人々の姿を学び、自然との付き合い方を見つめなおすべきであるとしている。現在の日本の人口推移をふまえて、「自然災害」に対して高いリスクを抱えた開発の必要性に疑問を呈し、新たな居住形態を模索すべきことを主張する。

第2章は、なぜヒトは低地に住むのかという問いについて、バングラデシュ中央部、ジャムナ（ブラマプトラ）川中流域のベンガル・デルタを対象に、居住域としての集落を生産域としての水田の形成時期と、その形成過程の解明を目的としたものである。本研究では、災「害」として洪水が強調される同国であるが、洪水を「利用」してきた人々の実態を明らかにし、さらに洪水「問題」そのものさえも相対化できるとしている。今後は、①ジャムナ（ブラマプトラ）川流域の上下流域での地形の環境変遷の復原精度の向上、②民族移動と土地開発との関係性を検討する必要性、③宗教や農耕技術の伝播論との整合性、④先駆的な土地開発史研究が進展した東南アジア地域との比較によって、その立体的な地域史の構築が進展するものとして締めくくっている。

第3章は風水思想とその実践を歴史地理学の立場から究明してきた著者による論考である。朝鮮半島で形成学派の風水がどのような論理で住むのによい場所を選ぶのか、その理想の地形について述べている。さらに選ばれた地形が理想にかなわず何らかの欠陥があった場合に、どのような方法でそれを修正しようとするのかについて考察を加える。人々が住む場所を決める際、決して利便性や実用性だけを考えるのではなく、風水のような内面的・宗教的な要素も加味して考察していくことの重要性を提示している。それだけに、今後の課題として、より具体的な手法を提示していただければと感じた。

第4章は、カラハリ砂漠に生活する採集狩猟民グイ・ガナ＝サンの1990年代前半の遊動から定住にシフトした時代の住まい方の原理を明らかにしようとする。著者の問題提起は、調査のため現地に滞在していた際、住民の引っ越しが行われているのを目にしたことから始まる。筆者は引っ越しの動き方から住まいの定め方を推測する手がかりを得ることができるのではないかと仮定し、聞き取り調査を行った。その結果、「人はどこに住まうか」は、資源と社会関係との二重構造で決まるとしている。先行研究に加え、対象地における調査マナー、社会性や空間の関係性

を論じている点など、ミクロに対象をとらえるだけでなく、マクロな視点から流動的に対象をとらえる手法は学ぶことが大きかった。

第5章では、社会変化のなかでいかに東ネパールの羊の移牧タイプが変化したかを、放牧地の変化に注目して移動経路の変化から明らかにし、あわせて社会変化のなかで山地の環境が果たす役割も合わせて考察している。著者は、羊の放牧が他の家畜の放牧に比べて高度差の幅と水平距離の幅が大きいことに注目し、1994年から2011年までの15年間の変化を分析する。その結果、筆者は、人がなぜ山に住むのかという問いに対して、山の暮らしは厳しく辛い、住みづらいこととは違って、平地にはない山の自然には恵みを強調し、今しばらくは、放牧は継続するし、山の暮らしも簡単には無くならないであろうと結論づけている。

### 3

第6章は地球環境の変動とそれらに対する人類の対応の歴史を考察したものである。人類の誕生から現在に至るまでの、膨大な時間のなかで起きた地球環境の変動を年縞堆積物から特定し、それらを衣類の誕生などといった人類の歴史とを合わせることで読み解いていく。著者の専門分野は花粉分析であるが、化石花粉の種レベルの同定を、年縞堆積物での花粉分析に応用することで、種レベルでの古生殖変動を解明が期待できるとしている。その切り口は非常に詳細なものだが、地球全体に及ぶ視点と対象とする時間軸の広さを見事に融合させ、初学者にもわかりやすく論じられている。文理融合といわれる地理学の可能性、環境史研究への期待が大きく膨らむ章であった。

第7章は近江盆地の地籍図の体系的研究を進める著者が、安土城築城期の大中の湖の湖沼環境変化を考察したもの。具体的には明治期の地籍図、17世紀から19世紀かけての対象地域の村絵図をもとにした景観復原である。隣接する愛知川の氾濫の記録を合わせ、これが大中の湖に及ぼした影響を考察することで、信長の時代における、大中の湖の政治的な役割や、湖上交通における地位にまで言及する。

第8章は、高山の地生態学から出発し、自然環境団体に勤務する著者が、地すべり・山くずれといった斜面変動の現象と、そこに暮らす人々の暮らしの関係を整理し、斜面災害多発地域に暮らす人々が斜面変動とどのようにつき合っていくべきかを3つの話題を事例に総論的に述べ研究の方向性を展望する。

1節では、本列島はプレートの沈み込み帯に位置し地殻変動が活発であるため、世界有数の自然災害多発地帯である。現在の生活の場すべてが過去の自然災害の痕跡といえるような地盤の変動、土砂の移動が激しい日本列島に暮らす我々は、自然災害から逃れることはできない。そのため、日本列島における環境史の少なくとも一部は、自然災害史と言い換えることが可能であると著者は主張する。とりわけ、現代社会では山地は過疎高齢化で生活の場としての重要性を減じている。山地での斜面変動について実感をもって理解している人が以前より減ってきており、改めて斜面変動と人との関わりを考えなおすことは、これからの自然環境と人との関わりを考える上

で意義があることを主張する。

2節「斜面変動がつくる日本の地形」は、斜面変動についての用語等を整理し、山地地形がどのように作られたのか、地質と地形の対応関係を図や写真を用いてわかりやすく説明している。

3節の「斜面変動をどう利用するか」は特殊な地形と農業的土地利用の関連が論じられる。第項では地すべり地につくられる棚田に注目する。棚田が山地や地すべり地につくられる要因としては、災害頻度が低地より低く、周囲から動植物資源を得やすい、農地として優良な土地であること、地すべり運動の過程で粉碎された礫があり、棚田の畦畔をつくる石が得やすく、基盤が適度にはぐざれているためとしている。また、地すべり地における水資源の確保といった問題点や、立地条件によっては農耕に適さない土地もあることにも触れている。「斜面変動が作る土壤」で、下伊那郡南部や佐久、諏訪地方など、山がちな長野県の各地域での斜面利用を具体的に紹介する。次に扇状地に作られる水田に焦点を当て、一般的に水田として利用されることは少ないが、実際の多くの場所、特に臨海扇状地では水田として利用されていることを指摘する。例として、静岡県大井川扇状地、富山県黒部川扇状地をあげる。4項は斜面変動の堆積物の利用法として、静岡県日本平の石垣いちごや碎石の利用を「斜面変動がつくる資材」として示している。

最後の4節では、「斜面変動はどう意味づけされてきたか」として、異形の地としての大規模崩壊地と治山と砂防、斜面防災をとりあげる。前者は、山梨県の富士川支流、春木川上流の七面山の「なないたがれ」とよばれる大規模崩落地を対象とする。この大崩壊地は、崩壊地が山地内部に続く洞穴のように描かれている「身延山図経」にあるように、その位置からも、現世とは別の世界へとつながる場所として認識されていた。それに対して後者では、治水、治山工事の変遷と大規模化に触れ、海外からの技術移入が斜面変動を、受容から、災害としてコントロールしようとするものへの認識の転換があるとする。その結果、砂防・治山事業による構造物は、文化的な遺産としての意味をも持ち、自然と人との対峙という新たにつくられた価値観を読み取ることもできるとしている。

最終節では、人の自然に対するありかたについて、自然災害をしばしばうけながら知恵を使って日本人は生きてきたが、明治以降には外国の技術を取り入れる形で、斜面災害を技術の力で制御することを選択した。しかし、半永久的に砂防・治山事業を行っていくことは資源の浪費ともいえ、その持続可能性は高くないと筆者は主張する。日本列島における斜面変動と人との歴史を今一度振り返り、改めて湿潤変動帯での防災、減災の在り方を考える必要があると締めくくっている。

人の心の変化を災害、特に斜面変動を通して切り込んでいく視点が評者にとって興味深く、地質学や地形学から宗教観・民俗学の話にまで触れながらの論旨展開は、地理学の裾野の広さと、奥行きを深さを実感できた。人と自然との関係性を「何で」解き明かしていけばよいか決めかねていた私にとって、方向性を示してくれるとても刺激に溢れる論考であった。

第9章は、山村の人々による焼畑の営みに着目することで、焼畑を通じた森林環境の利用のあり方を、単なる耕地の開発としてではなく、生態的な土地利用の深化として位置づけながら、山地環境の開発と利用について考察している。具体的には、17～18世紀の日本の山村、主に紀伊

山地周辺を対象とし、スギ植林などの山地植生の時間的・空間的な管理を構成する重要な要素として焼畑を捉え、その変化の環境史的再構築を試みている。森林破壊といった負のイメージで捉えられることの多い焼畑であるが、森林における生業としての有効性に着目すれば、その作業からは、山村を拓いて暮らす人々が森林植生に影響を与え、そこで生じた植物を利用するなかで、山地の植生遷移のあり方をコントロールする方向へと進んだ姿を見ることができるとして焼畑を再評価する。ただし、人間による操作や介入が衰退した場合は深刻な環境問題が生じるという脆弱性も指摘する。現在の環境問題が抱える自然の保全とその利用を、焼畑という伝統的な営みを通して論じており、人の自然に対する働きかけの重要性を再認識することができた。

第10章は世界自然遺産の小笠原諸島を題材に、過去の植生破壊とその後の森林の再生過程についての論考である。過去から現在までの人間活動による影響を前提とした森林植生の現状を提示し、歴史的背景や人間活動との関係をふまえた小笠原諸島の自然環境への理解を深めることが小笠原諸島における今後の自然環境の保全へと役立つことを筆者は期待している。方法としては、対象地域における森林破壊の歴史を戦前と戦後で比較し、択伐による植生変化、外来生物による在来植生への影響を検討した後、大洋島における自然環境の保全に向けて、今度の人間の営みの方策について論じている。

#### 4

第11章は新進の女性歴史地理学者による、京都市とその周辺で発生した水害について、土地台帳での被災地域の復原、水害からの復旧過程について明らかにした論考である。

序論では、歴史地理学における水害研究は、現在の治水や水害対策、ハザードマップの作製にいかされており、また人々の水害への対策の歴史も注目されてきたことを指摘する。その一方で、水害後の状況や、水害からの復旧期間といった点はあまり注目されてこなかった。人文科学からの災害研究史として近年求められているのは、単に浸水地域を復原するだけではなく、社会や人間生活の回復は災害後いかに果たされるのかという災害に直面する人間や社会のあり方を究明することである。

第2節では研究方法について述べている。京都市近郊農村である大原上野町を事例に、復旧過程という側面の人々の対応に注目する。用いる資料は土地台帳と地籍図である。その理由として、土地台帳には有租地が荒地となった場合に、一定の期間地租が免除された記録（免租記録）が残り、地籍図との併用で水害被災地域の復原が可能であることがあげられる。

第3節では、1935（昭和10年）年の京都市大水害を取り上げる。この水害による被害は、明治以降では最大規模で、後の鴨川大改修工事の契機ともなった。大原地域でも被害が報告された。

第4節は近代における水害への対応について、大原上野町の土地台帳に記載されている情報をもとに土地毎における免租期間の違いを分析し、免租期間内に土地の復旧可能であったのか、またその災害復旧はどのようにして行われたのかを、明治末期と昭和初期で比較検討している。

第5節は水害と土地所有形態についての記述で、上野町の土地台帳をもとに免租を受けた土地を所有していた人数と、水田の所有者に対する割合を明らかにし、水害の被災規模の影響を土地の所有面積や低地や高地という異なる場所に農地を所有している点から分析する。またオーラルヒストリーの手法も取り入れ、ある古老の考えと近代における水害への対応について紹介している。「山田があると水害のときにいい」これは京都府八幡市のある古老の言葉である。この地域も大原上野町とともに水害に悩まされていた地域である。大原上野町ではこのような言い伝えは聞かれなかったが、免租地の分布から所有状況を復原したところ、低地と高地に所有地が分散されていることで全滅を免れていることがわかった。以上の検討から、このような土地において水害とうまくつき合って生活を維持する方法が読み取ることができ、それは日常的に被災と復旧を繰り返しているからこそ生まれた知恵であるとする。

第6節はこれまでの調査結果をまとめ、次の課題として、行政から生活の援助、地域内での扶養があったのか否かといった生活維持方法の解明の重要性、さらには工学系の洪水対策研究の域を超えて災害復旧時に求められる点や、その社会背景の問題に言及している。その際、マクロな視点だけでなく、個人というミクロなレベルを追及することも必要である。その分析から水害対応の災害史から環境史へと展開していく。災害を身近に感じていた人々や個人の災害に対する知恵や考えが集まれば、新たな災害対策が編み出されるという可能性を示唆する。

本章は先の第8章と共通して、水害や地すべりといった災害を通して、人と自然との向き合い方や関わり方に触れている。第8章はその総説、本章はその各論といえよう。地すべりといった斜面変動と、河川の氾濫といった水害は災害の種類もその調査対象も異なるものであるが、どちらも災害という自然の現象を通して、人と自然の向き合い方を捉えようとしていた。そして自然に対する人の営みから、人の自然に対する心のあり方をも読み解こうとしている点に深い関心を覚えた。

第12章は1783（天明3）年の浅間山噴火災害の事例を取り上げ、災害絵図に描かれた内容の分析を通じて、災害がどのように認識されたのかを考察している。自然科学の分野では災害実態を明らかにすることが重視されるが、史料に関与した者の属性や地域には偏りがあること、災害史は文字だけでなく絵図などによっても我々に伝えられてきたため、災害認識に対しては、多角的な考察が求められる。その多様な認識方法があることを理解した上で、各々が日頃から災害に関心をもつことが、自己を見つめなおし、自らの環境を知り、地域社会を豊かにすることに繋がると主張する。

第13章は気候学に軸足を置く若手地理学者が、インド東部のアッサム州を対象地域として、稲作体系の変容を通じて地域住民と気候変動との関係性を明らかにしようとした試みである。筆者は稲作の気候変容への適応技術は、地域住民が自然環境をどのように捉えているかの手がかりになりうるとしている。気候変動というマクロな自然環境変動の影響は、住民が技術的に働きかけた結果として稲作体系の変容にも表れており、生業活動の変化を考慮に入れることで地域のレベルの気候変動を理解できる可能性を指摘する。具体的には、モンスーンがもたらす降雨と洪水、それによる稲作への影響を取り扱う。従来のコンピュータ上の気象データ解析に終始しがち

な気候学のあり方を反省し、ローカルな人間活動から気候を理解するという視点が目新しい。現在の環境問題を考えるにあたって、データだけで完結させるのではなく、実際にフィールドに赴き実態に触れることの重要性と、特定の側面からだけでなく広い視野の重要性を教えてくれる。

第14章も気候学者による論考である。フィリピンにおける気象災害の主要な誘因としての側面から、極端な降水の近年における傾向、及びその熱帯低気圧活動との関連性を分析する。その主な目的は、大気科学としての側面よりも、むしろ気象現象そのものの傾向の変化が、地域的脆弱性にいかなる影響を与えるかを示すことである。フィリピンにおける降水量の分布と地域性、近年においての極端な降水の特徴の論述に加え、フィリピン周辺の熱帯低気圧の動向を検討し、熱帯低気圧に対する現地での対応と近年の災害を分析する。日本国内でも、熱帯地方でのスコールと比較されるような極端な降水が確認される現状は、降水特性の変化が様々な自然的・社会的要因を持つ地域に対してどのように影響し、災害へと繋がるのかを考える必要があると述べている。

## 5

最後の第15章と第16章が含まれる第IV部は、地理学と環境研究の今後について、すでに名を成したシニアの自然地理学研究者が展望した興味深い論考である。

まず第15章では、門村は帯状自然地域としてのサヘルの定義を解説した後、自然・社会の両面で、激しく揺れ動いている様子を概観する。併せて、サハラ-サヘル諸国元首たちの政治主導で始まった、巨大自然資源管理プロジェクトである、「サハラ-サヘル大緑壁イニシアティブ」の課題に言及する。

これらの分析手段として、Google Earth や web 情報などが利用されるとともに、その有効性が再認識されてきた。現在の豊かな社会で暮らす人々にとって、インターネットを利用して論文やデータといった情報が簡単に集めることができることは、今や当たり前となっているが、従来は大きな労力が伴うことであったはずである。電子媒体を利用することの有効性や効率性、様々な情報を収集できることによる多面的なアプローチの可能性が改めて認識させられる。これらの媒体を有意義に使用することにより、さらに地理学のフィールドが広がることを期待したい。

最終章となる第16章では、戦後日本における環境史に関わる研究の流れを翻訳書も含めて追いつながら、今後の課題を筆者の体験を中心に述べている。かつて地理学が自然地理学と人文地理学に細分化され、その間において関わりが希薄であった時代から、社会問題や関心が複合的になり地球規模での学際的なものに発展していった現代までの歴史について理解を深めることができる。飯塚浩二、千葉徳爾、梅棹忠夫、中尾佐助、鈴木秀夫、安田喜憲、佐々木高明、市川健夫など、文明論や自然と人間の関係に関心のある人ならばだれもが知っている戦後の著名研究者を、辛口批評もまじえて縦横にしなやかに論じている。しかも最後には、このネイチャー・アンド・ソサエティ研究にまで結びつけようとする試みは、地理学の初学者にとっても、地理学が扱う裾野の広さ、環境史研究の可能性をひしひしと感ずることができる。その一方で、その多岐におよ



ぶ範囲とさまざまな手法を用いる故の困難性にも、私たちは向き合っていかなねばならないのだということもわかった。

本書はそれぞれの章が独立した論考であるが、私のように、これから研究テーマを選定している人、具体的な調査手法について決めかねている人にとって、大変参考になる本ではないだろうか。地理学者だけでなく、歴史学や理工学分野など周辺の分野も交えながら幅広く対象を扱っているため、多様な視点からのアプローチ方法を知ることができる。それだけでなく、第一線で活躍する研究者の具体的な調査手法をもこの一冊で学ぶことができるからである。

扱う地域は世界各地から日本国内にいたるまで、各所にいたっているが、そのどれもが研究者自らが足を運び、実際のフィールドから得た情報や声であるため、より生き生きとした文章と感ずることができた。

自然科学、工学や歴史学のように、特定の事象だけを深く掘り下げていくことはもちろんに大切である。しかしミクロ的に追及、究明した諸問題の数々を大きな枠で俯瞰的に捉え、それらの点を繋げることで、環境史として人の営みやあり方を明らかにする、地理学の大きな可能性を感じた。編者が述べたようなダイナミックな「地理学の魅力」を存分に受け取ることができる本となっている。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程)